

Neel Mukherjee の *The Lives of Others* 論 — インドの独立後の農地改革の挫折とナクサライト運動 —

加 藤 恒 彦

『他者の生活』(*The Lives of Others*) (以下『他者』) (2014年) は、インドの新鋭作家ニール・ムカジー (Neel Mukherjee) (1970-) の第二作であり、2014年度ブッカー賞にノミネートされた小説である。

ムカジーはこの600ページ近い長編小説において、独立後約20年を経たインドの1960年代の中盤から1970年代初頭の西ベンガル州を主な舞台に、対照的な二つの世界を交互に描いている。

その一つは、かつてインドの首都でもあったカルカッタ (現コルコタ) の上流中産階級のゴーシュ家の物語である。それは、ゴーシュ家の家長プラフラナスが植民地時代に創業し今や長男のアディナスが引き継いでいる製紙会社の盛衰の物語であるとともに、南カルカッタのバサンタ・ボーズ・ロード (Basanta Bose Road) に面した4階建ての屋敷に同居するゴーシュ家の4世代に渡る大家族、とりわけ女性たちの複雑かつ歪んだ人間関係の物語でもある。

もう一つは、独立後の不徹底な農地改革の結果、地主・金貸しによる小作農や土地を持たない農民への半封建的搾取と収奪が極めて非人間的な形態で存続している西ベンガルの農村を拠点に社会主義革命を目指すナクサライトの武装闘争の物語である。

この対照的な二つの世界をつないでいるのがゴーシュ家の長男の息子として生まれたスプラティックである。スプラティックは、ヒンズー教やカースト制度にまつわる因習や迷信に捉われた祖母や叔母たちのお互いへの嫉妬・羨望・軽蔑が渦巻く複雑な世界に育つが、母親のサンディーアの寛容で広い心に守られ育つ。サンディーアは、我が子の教育に関してはベンガルの中産階級の伝統に忠実に厳しい躰をほどこし名門プレジデンシー・カレッジに息子を入れるが、それはサンディーアの理解を超えたカルカッタに吹き荒れる政治の嵐のなかに息子を解き放ち、見失うことになってしまうのだ。

ムカジー自身も、カルカッタの中産階級の世界で育ち、母親の厳しい躰の下勉学に努めカルカッタの大学に入ったのち、ローズ奨学生としてイギリスに渡り、オクスフォード大学で英文

学を専攻、ケンブリッジ大学で博士号を取った英才である。そのような輝かしい学歴とは裏腹に、ムカジーは、自分の育ったベンガルの中産階級の世界に愛憎の入り混じった強烈で複雑な思いを抱き、それを描くことに一方ならぬこだわりを抱いていることは、第一作の『孤立した生活』(*Life Apart*) (2008年)を読めば痛いほど理解できる。しかし、長大なこの小説を論じるに際し、本論ではゴーシュ家の物語への言及は、ナクサライトとしてのスプラティックとの関連で必要な限りに限定し、農村における地主と小作人や土地をもたない農民の関係やナクサライトの学生の農村での活動にテーマを絞りたい。というのは、それが『他者』がそもそもブッカー賞にノミネートされた恐らく最大の理由だと思われるからだ。

ナクサライトの学生とは、カルカッタの中産階級家庭に育ち、1960年代後半にカルカッタで大学生となりインド共産党・マルクス主義 (ICP (M)) に参加し、やがてその左派の毛沢東派の思想に共鳴し、それを実践すべく西ベンガル、ビハール、オリッサ等の農村地域に向かい、先住民や低カーストの農民と暮らしや労働を共にし、やがて地主に対する武装蜂起を各地で起こした学生たちのことである。

60年代のナクサライトが何故、今注目を浴びているのか？

では何故、今、ナクサライトへの関心がインドのみならず、国際的にも高まっているのか？ ナクサライトの活動は、1972年には権力による未曾有の厳しい弾圧により沈静化したとみられていたのであるが、それ以後、インド中央部の「赤い回廊」と今では呼ばれるようになった先住民の住む広大な森林地帯で静かに継続され、今、新たに大きな運動として勢いを取り戻し大きな関心の的になっているからである。

インド政府による人権無視の新自由主義的鉱物資源開発とナクサライトの闘い

ナクサライトの運動に新たな生命を吹き込んだのは皮肉なことに1991年以来、新自由主義的経済政策に転換したインド政府自身であった。インド政府は、この森林・丘陵地帯の地中に埋蔵されているボーキサイトを始めとする豊かな鉱物資源の開発がもたらす膨大な利益に目をつけ、鉱山開発にかかわる多国籍企業と「覚書」を交わし、その土地を売り渡し、そこにヒンズー教徒が移り住む以前から住んでいた先住民や低カーストの農民を補償もないままに追い出そうとしてきた。こうしたインド政府のやり方は、長い抵抗の歴史を持つ先住民や低カーストの農民の抗議や抵抗を呼び覚まし、ナクサライトがそれに合流したのだ。こうして再燃したナクサライトの運動は、ジャングルを拠点としたゲリラ活動の形態をとり、インド政府の軍隊との対決へと発展し、2006年には当時のインド国民会議 (INC) のシン首相をして「インドの治安への最大の脅威」と言わしめるまでの事態になっており、インド政府は大量の軍隊を投入し「オペレーション・グリーン・ハント」(Operation Green Hunt) と呼ばれる大掛かりな森

林地帯掃討作戦を始めたのだが、それが今なお継続しているのである。(Roy 2012, pp.1-34)

しかし、戦闘が行われているのは森林地帯のジャングルの中であり、一般のジャーナリストの取材活動が規制され、かつインドの一般紙は毛沢東派をテロリストとしてしか報道しない為、この問題がニュー・ヨーク・タイムズ等で取り上げられ¹⁾、国際的な関心と呼ぶようになったのはここ最近のことであろう。

国際的関心の高まりに拍車をかけたのは、ブッカー賞受賞後インドの様々な問題を取り上げ、社会活動家兼作家として精力的に発言してきたアルンダティ・ロイがこの問題を真正面から取り上げたことであろう。ロイは、2010年の始めにオリッサのダンテ・ワダにある毛沢東派の森の拠点に単身訪れ、数週間に渡り毛沢東派や先住民の人々と森のなかを転々としつつ、毛沢東派の幹部や女性党員とインタビューを重ね、彼らの闘いの歴史と現在、何故、何のためにゲリラ活動を行っており、「赤い回廊」にどのような行政機構を創り出しているのかを『同志と歩く』(*Walking with Comrades*) (2011年)にまとめたのである。

先住民や低カーストの農民の人権を無視したインド政府の鉱物資源開発に批判の目を向けているのはロイだけではない。ロイ自身がエッセイ「チダムバラム氏の戦争」(“Mr. Chidambaram's War”) で触れているように、インドの知識人、人権・社会活動家、市民団体等の間でナクサライトに率いられた抵抗への共感とインド政府のやり方への批判が広まっているのだ²⁾。そして、それが、1960年代に農村に向かい地主との武装闘争に参加し、後に警察に逮捕・拷問され、この小説の主人公のように殺された多くのナクサライトの学生たちの運動や生き方を見直そうという機運につながっているのだろう。本論もそのような立場からの見直しの試みである。

*

*

*

スプラティックはどのようにしてナクサライトになったのか？

スプラティックは、学生運動や労働運動の嵐が吹き荒れる1960年代中盤にカルカッタの名門プレジデンシー・カレッジの学生になり、インド共産党・マルクス主義(CPI(M))の学生組織で積極的に活動するうち、議会における多数派の形成により権力の掌握を目指すCPI(M)のなかの主流派の戦略に不信を抱き始めていた。スプラティックが心惹かれたのは『解放者』(*Liberator*)誌上に掲載されていたチャル・マズムダ(Charu Mazumdar)の理論であった。マズムダは、農村から都市へという戦略に基づき中国革命を成功させた毛沢東に倣い、農村部における地主による小作人や土地を持たない農民への過酷な搾取と収奪にこそインドの最大の問題があり、「作物は耕作者のものだ」という原理に基づき武装した農民の反乱による土地改革や富の再配分を目指していたのだ。そしてスプラティックは、1967年の始めに、マズムダの理論に依拠した農民の武装蜂起が、西ベンガル北部の茶農園地帯のナクサルバリで実際

に勃発したことに大きな感動を覚えたのだ。しかし選挙で州政権についた CPI (M) 主導の連合政府 (United Front Government) がそれを武力で弾圧するのを見、ナクサライトに加わる決意をしたのである。(TLO, pp.33-38)

『他者』の世界の二つの歴史的前提

ここでまず、この小説が寄って立つ歴史的前提について説明しておこう。一つは、インドの共産主義運動が、議会主義と武装闘争という相対立した方向に分裂することになった事情であり、もう一つは、その分裂とも深く関連する独立後約 20 年を経た時点でのインドの農地改革の不徹底性である

インドの共産主義運動における路線論争と毛沢東派

インドの共産主義運動の歴史を研究したロス・マリックによれば、インド共産党は 1920 年にソビエトの影響のもとで設立されるが、国際共産主義運動の路線を巡る中ソ論争に揺れる。その背景にあったのは、根本的には次のようなインド的な事情である。すなわち、第一に、「独立後、世界のなかでも最も貧しい国（地主に支配される貧しい農村を背景にもつ国）で活動しなくてはならない半面、よく発達した国家的基礎の上で民主的な選挙政治に参加することができたという点である。民主主義制度は共産主義者が選挙や政府に参加することを可能とする反面、インド国家は共産主義者の武装闘争を鎮圧するに十分に強大であった。インド政府と持続した武装闘争を維持できないので、共産主義の主流は、憲法的枠組みのなかで活動するよう適応せねばならなかった。しかしながらこの路線は期待される速やかな効果をもたらさなかった。(Mallick 1994, p.7)。

第二に、中ソ論争による世界の共産党の分裂のなかで、地理的に中国に近い国々は抑圧的な体制下にある農村社会である傾向が強く、そうした国にとっては中国モデルが権力への唯一現実的な道を提供していると思われ、資本主義が発展した国々の党は議会を通じた平和的移行を目指すソビエト派になる傾向があった。だが、インドは、その両方の側面を持っていたのだ。(Mallick 1994, p.30)

そのためインド共産党内部に、農村に闘争の基盤や組織を持った傾向（左派）と都会を背景とする上流階級出身の西洋的知識人が多く、議会制民主主義を基盤に目的を達成しようという傾向（右派）が存在した。(Mallick 1994, p.32)

第三に、その後の党内の右派 (CPI)、中道派 (CPM)、左派 (毛沢東派) の三つ巴もえの路線論争を経、中道派が勝利を治め 1964 年に ICP (M) を結成するがその左派 (毛沢東派) は農村での武装闘争に向かい 1967 年西ベンガルのナクサルバリで農民蜂起を起こす。それは皮肉なことに、ICP(M) が史上初めてベンガル州で連合政権を樹立した直後であった。ICP(M)

は当初、話し合いによる解決を目指すのが連合政権の他の党からの圧力もあり、武力による鎮圧の道を選び、69年に左派を党から除名する。その直後、左派は ICP (M-L) (毛沢東派) を結成する。(Mallick 1994, pp.142-143)

毛沢東派は、半封建的な農村を拠点に独立闘争の時代から活動してきた人々であり、中国社会主義革命の成功に倣い、「耕作者に土地を」というスローガンのもと農民蜂起により地主勢力を打倒し、農村に解放区を形成し、都市を包圍し中央権力に攻めあがるという戦略をインドにおいても実践しようとしていたのである。

インドにおける独立後の農地改革—日本との違い

では独立後約 20 年も経った時期にナクサルバリの農民蜂起を引き金に、一連の武装蜂起が農村部で相次いだのは何故であろうか？それを考える上で、第二次大戦後、日本で GHQ の下で行われた農地改革と独立後のインドの農地改革を比較して見ると、何が問題であったのかが分かりやすい。

日本の戦後の農地改革と比較した独立後のインドの農地改革

戦前の日本の農村部にも半封建的な不在地主制度が存在し、農村の貧窮と過剰人口、地主と小作人との半封建的従属関係が、日本の軍国主義による対外侵略の温床であったとされ、その改革の必要がすでに戦前の時代から叫ばれていた。そして敗戦後、絶対的な権力をもつ GHQ と、それに協力する日本国内の民主化勢力により農村部の半封建的な土地所有関係に大胆なメスが入られ、地主の土地を政府が買い上げ、折からのインフレも手伝い小作人が安い値段で土地を手に入れることができた。その結果、多くの自作農が生まれ、戦後日本の民主主義の基礎が築かれた³⁾。

ではインドの場合、独立後からナクサライトの農民蜂起が起きた 1960 年代の末あたりまでの農地改革の状況はどうであったのか？

インドの場合、ガンディーやネルーに指導されたインド国民会議 (INC) は、独立運動のなかで、人口の 8 割を占める農村部における最も虐げられた物納小作人や土地を持たない農村労働者の要求を取り上げ、その運動を支援した。何故なら、イギリスは農村部における徴税機構としてムガル帝国の時代から存在するザミンダール制度という貴族的不在地主制度を利用し、物納小作人を何段階にもわたり中間搾取する過酷な仕組みを作り上げていたからである。(Chandra 2011: 21. Land Reform (I) No 9081)

従って、独立後の国家建設において、農地改革は緊急の課題とされ、まずザミンダール制度の廃止、土地所有面積の上限設定、上限を超えた土地の土地をもたない農民への分配、小作人の耕作権の保証、農民共同組合の結成等の原則を中央政府が決定し、それを各州の事情に応じ

法制化するという形を取ったが、それに対する強力な抵抗も各州の大地主や豊かな農民の間から起きたのである。

西ベンガルの場合、1950年代の末までにザミンダール制度は廃止されたが、これによって最大の利益を得たのは、それまで不在地主から土地を借り、それを物納小作人に又貸しし中間搾取を行ってきた豊かな農民であった。彼等はジョットダーと呼ばれたが、新たな不在地主や郷地主となり、ザミンダールに取って代わったのだ。

この段階で次の二つの法律的措置が取られた。一つは、ジョットダーの所有できる土地には上限 (Land Ceiling) が設定され、それを超えた土地は農民共同組合を通じ土地を持たぬ農民に市価以下の値段で払い下げられることになった。しかし、それには法的抜け道があった。第一に、上限は地主の家族単位にではなく家族の個人単位に設定されたため、所有地を家族の構成員に分けることが可能だった。だからインド全体でも上限を超えた土地の土地をもたぬ農民への払い下げは極めて不十分にしか実現しなかった。二つ目には、物納小作人もその土地を一定の期間耕作している事実を登記すれば、耕作権を法律によって保証されることになったが、ジョットダーは農民の無知に付け込み登録をさまたげ、彼等をその土地から追い出し、自分の所有地を増やした。(Chandra 2011: No 9333-9499)

従って、戦後の農地改革の結果、多くの農民が短期間に自作農となった日本の場合とは対照的に、西ベンガルや殆どの他の地域の農村では、独立運動の時代に確認されていた物納小作人の耕作権の保障要求や土地を持たない農民への農地の分配が、地主階級による抵抗により実現せず、新たな形での不在地主や地主・高利貸による搾取と収奪の仕組みが依然として存続することになっていたのである。(Chandra 2011: Land Reforms (III), No 9621-9646)

そのような歴史的な前提条件を確認した上で、まず、都会育ちのスプラティックが農村に引き付けられたその動機とは何であったのか？小説を具体的に分析して行こう。

スプラティックを農村に引き付けたもの

次の文章は、カルカッタの家を捨て農村に向かうスプラティックが母親のサンディーア宛てに書いた手紙の一節である。

かあさん、僕は消費し、つかみ取り、利用することに疲れ果てた。体が膨れ上がり息もできない位だ。空気を吸うためにここを立ち去り、身を清め、僕に押しつけられた人生を押し返し、自分自身の人生を作り出すのだ。僕は借家に住んでいるような気がする。自分自身の家を探す時がきたのだ。(TLO, p. 59)

スプラティックは、カルカッタの上流中産階級のゴーシュ家の生活を飽食と欲望に汚れたも

のと感じ、身を清め、自分本来の新たな生活を目指そうとしているのだ。スプラティックが都会に住む自分の生活をそのような言葉で表現している一つの理由は、小説の「プロローグ 1966年5月」で描かれているある農民が自分の妻と三人の幼子を自らの手で殺害し、自分は殺虫剤を飲んで自殺する凄惨な出来事を知っていたからである。

それは1966年の5月、酷暑の西ベンガル州の田舎で起きた。この地域では干ばつが3年目となり、土地が干上がり、井戸に水もなくなり、米がとれず、5、6日に一度の食事しかとれない状態が続いていた。その男は、朝の間中、カップ一杯の米粒を恵んでもらうため地主の屋敷の外で座っていたのだ。最初に物乞いに地主の屋敷を訪れたとき、地主は戸や窓を閉ざしていたが、その男がいつまでたっても立ち去らないことを知ると、今度は守衛を立てた。そしてその守衛は棒で彼の肩を打ち、嘲笑うのであった。

やがてその男は立ち上がり、家路につく。家の外で彼の帰りをまっていた妻は、彼が手ぶらで帰ってきたのを知る。子供たちは骨と皮となり動く元気もない。当初は子供たちの瞳には飢餓感が見られたが、今では何もない。地主は、最初の借金の利子を支払わないとお前の子供は飢死することになるぞ、と言ったのだ。自分は子供たちを際限のない惨めさの世界に生み出してしまったのだ。今となってはすべきことは一つしかない、と男は決意し、使い慣れた鎌で次々と子供たちと妻を殺害し、自分は殺虫剤を飲むのである。(TLO, pp.1-4)

この「プロローグ」で印象深いのは、二年越しの干ばつで飢えた家族をかかえた農民の窮状にも増して、その農民に対する地主・金貸しの血も涙もない態度である。ここにこそスプラティックを行動に立ち上がらせた要因、すなわち、社会的な不正義への憤りを見ることができらるだろう。スプラティックには、妻や子供を殺し自殺した農民の気持ちを想像し、地主の態度に怒りを感じる共感能力と正義感が備わっていたのである。

この点で、アミタブ・ゴシュは、『他者』への書評⁴⁾のなかで、1960年代の学生ナクサライト運動は「公的生活圏における啓蒙と家庭における保守主義との矛盾への反応」にあった、というラビンドラ・レイの見解に賛同し、「実際スプラティックはそうにして過激な政治的見解を持つようになったのだという。つまり、プレジデンシー・カレッジ（アマティア・センや他の輝く星たちの母校である）で学生であった時にスプラティックは、大学で知った思想と家庭で彼が見た息が詰まるような偽善やさりげない残酷さとの間の矛盾を融和させることができなかつたのだ」という。

だが筆者は、スプラティックは家庭内の女たちの「ねじまがった心」の世界にそれほど取り込まれてはいなかったと考える。それは、寛大な広い心を持ち、家庭内の女たちの争いから距離を取っていた母親サンディーアに守られていたからである。(TLO, pp.452-453) だからスプラティックが、大学に行き、それまで知らなかつた広い世界で生きる人々（「他者」）が直面している深刻な社会的不正義に気づき、それと対峙することもできたのだ、と考える。

またゴーシュは農村における学生ナクサライトの運動について極めて否定的で、次のように評している。

ムカジーは、ナクサライトが流血の事態を楽しむグロテスクさ、自分勝手な幻想、その人々の為に闘うというまさにその当の人々を危険に陥れたこと、等を詳しく描いている。……
スプラティックは、自分の通った後に悲惨な事態を残し、彼の革命的な情熱は彼がそのために闘う人々に破滅と死をもたらすのである。

ゴーシュは、このように書いた後、現在「赤い回廊」で闘っている毛沢東派の人々の抵抗とこの時期の学生ナクサライトの運動を区別し、前者の重要性を否定するものではないと述べている。筆者としては、ムカジーの描き方のなかにそのような要素があることを否定はしないが、大局的に見るならば、より肯定的な評価をしたい。ムカジーは何よりも、この当時の西ベンガルの農村における地主階級・金貸しによる、先住民や下層カーストの小作人や土地をもたない農民への狡猾で過酷で無慈悲な搾取と収奪の実態を明らかにし、彼等が武装蜂起へと立ち上がらざるをえなかった必然性を描いており、同時に、スプラティックが都会の上流中産階級の育ちである自分と先住民や下層カーストの農民たちとの違いを痛いほど意識しつつも、彼等の生活と労働から学ぶ姿勢を貫く姿や、現在のジャングルにおける「抵抗」につながる教訓や反省を行動のなかで模索する姿を描いているからである。

そうした基本視点に立ち、次に、カルカッタを去り農村部に向かったスプラティックの行動を順を追って見て行きたい。

マジェリア村に向かうスプラティック

スプラティックが二人の同志とともに向かったのは西ベンガル西部のビハール、オリッサとの境に沿った貧しい農村地域であった。そこでは未だ封建制度が支配しており、地主や金貸しによる農民への収奪が最も非人間的な形態をとっている処で、先住民が住んでいる地域でもある。先住民の古の土地はヒンズー教徒に奪われ、先住民は一種の奴隷状態に置かれているのだ。そしてそのような運命に甘んじることを拒否した人々は、森に逃げ込んだという。

スプラティック達の目的は、土地を持たず、物納小作人や日雇い労働者として働く貧窮した農民に依拠し、彼らに政治的教育をほどこし、機会を見て地主階級に対する彼等の怒りを武装闘争へと組織することである。それが権力を取る唯一の方法であるというマツムダの理論を信じていたのだ。(TLO, pp.60-61)

スプラティックは、カルカッタから3つのグループが出発したのを知っていたが、彼のグループにはサミールとディラールがいた。サミールはカルカッタ大学の優秀な学生であったが学業

を放棄し革命運動に身を投じていたのである。一見、典型的なベンガルのインテリ青年で、詩や短編小説にも手を染めていた。しかし、そうした外観の裏には「鋼のような芯」があることを後にスプラティックは知ることになる。もう一人のディレールはこれまでの人生で貧しさしか経験してこなかった人間のタフなところがあった。彼の父親は工場労働者で、労働者を解雇しようとする会社に抗議する労働組合のストライキに会社が工場閉鎖で対抗した為に、3年間収入が無く、一家は生計の道を大学に通う息子のディレールに頼っていたのだ。しかしディレールは殆ど大学には通わず社会そのものを変える道を選んだ。何十万というよく似た境遇の若者がいて大学を卒業しても職に就けない現実に直面し、社会の病巣の中心に飛び込む道を選んだのだ。(TLO, pp.61-62)

ダム建設や石炭、鉄鉱石の採掘によって土地を奪われた先住民

スプラティックが向かったのは西ベンガル西部のメディニプールの西端の地域でビハールに接する処であった。そこではどこを見回しても地平線の端には深い森があった。そしてこの森は彼らを守ってくれたのである。インド憲法により「指定部族」と呼ばれる先住民で、地主や高利貸や石炭や鉄の採掘会社やダム工事によって土地を奪われた人々が逃げ込んだのもその森であった。彼らは肌の色が黒く、「遅れた」とされる人々で、インド政府やタタ製鋼やヒンドゥスタン・ケーブルと言った大会社の権威を前にして彼らの声に耳を傾けるものなど誰一人いなかったのだ。

スプラティックたちがやって来たこの地域にはここ最近騒ぎが起きていた。前年のナクサルバリの茶農園での反乱も突然起きたものではない。賃金、労働条件、土地への権利を巡り長い間労働運動が続き、騒動が醸成されていたのだ。そしてこの地域にも長年にわたる大いなる非道の歴史が存在し、ナクサライト運動を受け入れる基礎や条件が整っていたのである。

彼らは列車の幹線から支線に乗り換える。すると駅で汽車を待っている人々は都会の人々より背が高く、肌の色が黒く、縮毛をしていて、女たちはより内気で、ベンチには座らず汚い床に座るのだった。ジャルグラム (Jhargram) で警官がいないか警戒しながら降りる。そこで最後の紅茶を飲む。これから向かうところでは紅茶など贅沢品だったからだ。そこからはベルパハリ (Belpahari) にバスで向かう。ベルパハリの端っここには毛沢東派のコンタクト・パーソンを務める自転車屋があり、そこには弱い電気が日に4時間しか通わない。それも配線にきた職員に賄賂を払った後のことである。そしてこの地域の村には電気が全く通っていないとその男は言う。それを聞いてスプラティックは、「ここはダムがある地域じゃないか？」という。しかし、その電気はこの地域の為のものではなく町や大会社の為のものだ、という。彼らの村は水没し、それに対する補償金や代替地の補償は殆ど何もされなかったのだ。この地域に住んでいるのは先住民やダリッツ (不可触民) ばかりで誰もその連中のことなど考えない、忘れら

れているのだ、という。(TLO, pp.61-65)

スプラティック達が20キロ近く歩いてたどり着いたのはマジェリア (Majgeria) という村であった。この辺では徒歩が唯一の交通手段だ。そして、この地域ではすでに毛沢東派の「革命的共産主義者インド調整委員会」(AICCCR) (インド共産党 (毛沢東派) の前身) によって我々を受け入れる下準備がされていた。(TLO, p.95)

次にムカジーは、彼らが活動の拠点に定めた地域と CPI (M) との関係进行を明らかにする。スプラティックよりも先にこの村にやってきて活動を行っていたサミールやディレールがまず説明役となる。

飢餓救済の人的支援活動を選挙に利用する CPI (M)

ディレールによれば、彼らが最初この村にやってきたとき、村人にこん棒で襲い掛かかれてもしかたがなかったという。と言うのは、この村では選挙の際、村長の指示に従って投票することになっており、村長はその見返りに収穫物の形で一種の賄賂をその政党から貰っていたのだ。もちろん農民には何の見返りもない。2年前の干ばつするとき CPI (M) の活動家が救援物資の米をこの村に配って回った。この村が1967年の州議会選挙で CPI (M) に票をくれる村だと思っていたからだ。しかし、この村が1962年の選挙の際に INC に投票したことを知ると、CPI (M) の地方幹部は救援物資を飢えた農民から取り返したのだ。だから、ディレールたちがここに最初にやってきた頃、彼らの票を目当てに来たのではないと説得しなければならなかった、という。つまり、彼等は CPI (M) に反発をもっていると思われる村を工作の対象として選んでいるのだ。(TLO, pp.97-98)

人道支援としての救援物資を党利党略に利用するだけでも大いに問題であるが、それで村全体の票を買収するという民主国家であれば選挙違反で逮捕されるような行為がまかり通っているのである。それは、村の農民が自作農として独立しているのではなく、小作農や土地のない農村労働者として地主に支配されているからに他ならない。インドの民主主義を内実化する為には農地改革が必要であった所以である。

ムカジーは、さらに1967年初め西ベンガルで初めて成立した CPI (M) 主導の「統一連合政府」によって擁護され奨励された農民による一見ラディカルな土地改革運動を取り上げる。

連合政権に加わる左翼諸政党に組織された土地を持たぬ農民は、INC を支持するジョットダー (地主) のもとにナイフ、槍、棍棒、斧で武装し、押しかけ、地主を追い払い、非合法に (上限を超えて=筆者) 獲得され、それまでの所有地に付加された土地の四方に赤旗を立て、貯蔵された穀物を分配し、収穫物を差し押さえ、そして、これが根本的な土地改革の第一段階だ、と宣言したのである。その間、警察はどうしていたのか? 何もしなかったのだ。CPI (M) の本部から命令がだされて、これは合法的で民主的な闘いであり、土地改革、土地の究極的

な私有廃止に向けての最初の一步であると宣言していたのだ。

この土地を持たぬ農民の味方という政治的ジェスチャーによって CPI (M) はこの地域の 50 万の農民の支持を得たのである。しかし彼らには本当に地主から土地を取り上げ農民に配分する気などなかった。その本当の目的は、現在の連合政府ではなく単独で今後過半数を獲得することである。

しかし、その直後、ナクサルバリ事件が起き、土地を持たない農民が地主の土地を実際に奪おうとしたとき「連合戦線政府」は、その運動を武力で弾圧し、CPI (M) は左派の毛沢東派を除名したのだ。それは地主からの土地の収奪に反対する中央政府にすり寄り、選挙で過半数を獲得し、西ベンガル州の権力を単独で手にするためであった、と毛沢東派は、見なしていた。

スプラティック達は、そのような州政府公認の土地収奪を経験した村を避けることに決めていた。CPI (M) の影響力の強いそのような村では、村人達は運動をさらにゲリラ活動にまで進めようという彼らの提案には賛成しないと思われたからである。また、大地主は決してバカではないので、CPI (M) の地方の幹部に保護料を支払っていた。法で定められた上限を超えて彼らが所有している土地を農民が奪いに来たときに奪われないためである。これが古典的な CPI (M) の政治手法だ、とスプラティックは言う。(TLO, pp.99-101)

ここで筆者として注釈を加えるとすれば、実は、1967 年に「連合政権」が成立しえた大きな要因は、INC から分かれた「バングラ議会」も参加していたことがあり、ナクサルバリでの反乱についても ICP (M) が「背景には社会的・経済的問題がある」と指摘したのに対し、「バングラ議会」は「法と秩序」問題としてのみ扱ったのだ⁵⁾。従って、「連合政権」を維持しようとする限り、農地改革には慎重に振る舞う必要があったのである。だからこそ、より大胆な改革の為に ICP (M) 単独過半数の獲得が必要であったのだ。

ムクンダの物語：地主に小作権を騙し取られた男

ムカジーが次に描いている小作人のエピソードは、西ベンガルにおける独立後の農地改革によりザミンダール制度が廃止され、かつて国家（イギリス）と直接耕作者との間に立って中間搾取を行っていた農民が今やジョットダーと呼ばれる新たな地主となり、小作人としての彼の権利さえ奪おうとした多くの事例の一つである。

村で活動を始めた三人に、一人の老齢の農民が唾を吐きかけた。その男が言うには、イギリスの支配から脱して 20 年になるが自分たちの暮らしは何も楽にならない。どうしてだ？ 文字も読めない俺たちには何もわからないが、ただ分かっているのは、俺たちの血をすする連中の肌の色が変わったことだけだ、と言う。

後でわかったことだが、このムクンダ・マシャン (Mukunda Mashan) という男は、4 ビガス (約 1.3 エーカー) の土地を小作人として耕していた。父親の代からだ。西ベンガル州の

1952年の「土地所有権法」(the Land Tenure Law)によればムクンダは長年に渡ってその土地を耕して来たのだから小作人としての耕作権を法によって保証されるはずだった。だが、その為には役場で耕作地の登記をしなければならない。政府の役人が土地の測量にやってきたとき、村の地主であるジョトダーはムクンダに選択を迫った。もしムクンダが小作人として登記したいなら、即座に土地から追い出す、もしそうしないなら小作人として置いてやる。土地から追い出されたらムクンダは生きて行けない。そして地主の言いなりになることが長年に渡る支配によって農民たちの頭に組み込まれている。ムクンダは、長年登記せずにやってきたのだから、今更してもどうなるのだ、と思い登記しなかったのだ。村の長や役人はムクンダが低カーストに属しているのだから、彼に知識を与えるのは不利益だと知っていたのだ。そしてそれからすぐにムクンダは土地から追い出された。登記していないためにムクンダは法に訴えることもできなかった。だからムクンダは、もう一段下の小作地を持たない農業労働者に格下げされたのだ。その結果、地主は自分の80エーカーの土地にムクンダの土地を積み上げることができたのだ。(TLO, p.98)

この話を聞いてスプラティックは、人間の性質のなかで、これは自分には決して理解できない点だと思う。どうして十分だとか、足りたとか言う言葉が人々の人生のなかで意味を持たないのか、という点である。欲が人の魂を食ってしまったのだ。

スプラティックがカルカッタにいた頃、カソリックの学校に通う姪の机の上に置いてあった聖書をめくると次の文章が目飛び込んできた。

「持てるものはさらに与えられ、豊となり、持たざるものは、持てる僅かなものも奪われるのだ」。これが世の常なのだから、どうして僕はあたかもそれがこの世の最大の悪であるかのように闘うのか？いや、あるかのように、ではない、最大の悪なのだ。だから生きる唯一の道は、この大きな間違いと闘うことなのだ。(TLO, pp. 95-99)

ここには社会的不正義への憤りとともに、スプラティックを毛沢東派の活動に駆り立てるもう一つの根本的な価値観が示されている。彼は欲に駆り立てられ弱者を食い物にする人間や、それを合法的に保証する社会の仕組みや倫理性の欠如が許せないのだ。

実はムカジーは、スプラティックが幼い頃に、ブッダの思想の影響を受けたことをこの小説の他の場所で示している⁶⁾。毛沢東派の活動に立ち上がったスプラティックの心の奥には、人間が欲に溺れ、争いあう世界を見たブッダが、欲望を煩惱と見なし、その克服を目指したことへの共感があるのではないかと思う。

だが、毛沢東派となったスプラティックは、宗教による解決ではなく武装闘争による農村の所有関係の革命によって解決をめざす。それほどに農村の実態はひどいことをさらに例を挙げていく。

マジェリア村で聞いたニタイ・ダスの物語

その一つがプロローグで描かれたニタイ・ダスの物語だ。三人がやって来たマジェリア村は、プロローグで語られたニタイ・ダスが住んでいた村だったのだ。三人が落ち着いたのは村の一番外側に位置する先住民サンタルの住む所であり、彼らはそれぞれ別の家族の家に住み込むことになり、スプラティックはカヌー (kanu) とビジリ (Bijli) の家族と共に暮らすことになる。スプラティックは、彼等からニタイの話を知りたいと思うのだが、そこではその話は一種のタブーとなっていて誰も話したがらないのだ。しかしスプラックは、そのうちがまんできなくなり、ついにある晩、食事のときにビジーに話を切り出し、以下の話を聞き出す。

ニタイは、先住民が住む地域から一つ内側の円周に住んでいたと言う。円周の一番内側には上位カーストの人々が住んでいるのだから、恐らくニタイはダリツ (不可触民) だったのであろう。

ビジーは、ニタイの妻が飢えに苦しみ食べ物を恵んでもらいにやってきたこと、しかし、最初は恥じらいから恵んでくれとは言えず、ビジーはそれを察し、できるだけことはしたと、やがて、最後には飢えがあまりにひどくなり、その恥じらいさえ消えてしまったこと、そしてある日の昼下がり、仕事のあと疲れ果て、家の外に倒れているニタイの妻を見て驚いたという。「神は私たちを罰するために腹をお与えなさった」とニタイの妻はいつも言っていたという。

カヌーによれば、このアマン米を産する地域で自分の土地を持たないニタイは小作人として働くか、不作のときには日雇い労働者として畑で働いた。マジェリア村は河から遠いため二毛作はできず、年に数か月しか仕事が無かった。その為、4人の家族を食わせてゆくだけの食物を得ることができず、また、農業以外に働き口も無かったのだ。ニタイは小屋の脇に小さな菜園をもってヒョウタンや玉ねぎを植えていた。ニタイは自分と家族を養うための金に本当に困ったときにはその猫の額ほどの土地さえ高利貸に担保として渡さなくてはならなかった。カヌーは、そんな時には人は必至になる、という。そして高利貸はなんだって要求できるのだ。もし高利貸が二キロの米を貸す代わりに一月後に3キロの米を返すことを条件としたとしても、その時には、本当に返せるのか、とは考えない。飢えている家族を救うことしか頭にないのだ。(TLO, p. 124)

カヌーは、言う。こうした昔ながらのやり方でやつらはニタイを餌にしたのだ。ニタイは、困ったときに家族を支えてくれる土地を失い、利子が重なり、それを支払う為の高利貸が所有する畑で働かないといけな。しかも無償で。そして他人の土地で労働する日雇い労働者に配給される最低限の食事さえ与えられないこともあるのだ。過去二年間は干ばつや飢餓や不作がひどかったのだが、地主や高利貸にはチャンスだった。干ばつによる不作を口実に賃金を下げ、彼らが土地で働くときの毎日の食事さえふるまわないのだ。貧乏人の俺たちは、やつらがこの食糧不足を利用し、穀物を倉庫に貯めこみ、深夜トラックで町に運びだし闇市で売って莫大な

利益を得ていることを知らないとも思っているのだ、とカヌーは言う。

スプラティックは、この話を聞きこのような田舎の農村での出来事が昨年のカルカットでコメの配給所が中産階級の人々に襲われた事件を思い出す。配給所に米が無くなったのはそれが闇市に回され高額で売られていたからなのだ。そして中産階級の人々にさえ食物がまわらないとすれば、こうした見えない人々にはどのような希望があるのだろうか、と思う。(TLO, p.125)

スプラティックはニタイの「肉体的衰弱」にも思いを馳せる。

スプラティックの頭から離れないのは、そのような中で働くことを強いられたニタイの肉体的衰弱のことである。何日も飢えたままで働かなくてはいけない。普段の二倍、三倍の努力で。何故なら、彼の稼ぎや収穫したお米は高利貸のものだからだ。高利貸は米を市場価値よりも安い値段で手にいれていた。金貸しはニタイがかりうじて働けるだけのものは与えていたのだらうと思う。死んでしまっただけの本も子もないからだ。自分の血を最後の一滴まで絞りとり、どうしようもないのはどんな気持ちだろう？あがけばあがくほど深みにはまってゆく。地主・金貸しをそうした行為に駆り立てるのは限りない欲望である。(TLO, p.126)

このようにしてムカジーは、西ベンガルの農村における先住民や低カーストの農民に対する地主・金貸し階級の血も涙もない無慈悲な扱いの事例を描いて行く。そしてムカジーはニタイがダリットであることを彼の居住地により示し、地主の無慈悲な態度の背景にカースト的抑圧が存在していることを暗示しているのである。

農作業の現場から階級敵を知る

ムカジーは次に、スプラティックたちが農業労働の厳しさを体験する姿を描く。スプラティックを受け入れたカヌーは、最も地位の低い日雇い労働者だった。カヌーはスプラティックに沢山の彼の階級敵を指さした。それは日雇い労働者を低賃金でこき使う小さな区画の所有者たち、そのなかには大地主の言いなりになる少数の農民や、不在地主のジョットダーの番頭で日雇い労働者を監督する連中がいるのだ。(TLO, p. 144)

ここにはナクサライトの非常に狭い階級敵概念を見ることができよう。このように狭く敵を規定することによって彼らは、大地主の影響下にあるすべての自作農民を敵に回してしまうのである。

収穫の労働を体験するスプラティック

三人はそれぞれ別の畑で鎌を使い稲刈りをする。畑は最初見たときには決して広くは見えない

かったが20分も指示されたように体をU字方に折り曲げ稲を刈っているとスプラティックの首と背中が悲鳴を上げ始める。畑が今や海のように思え、そこを泳ぎ渡らないといけないのだ。またたくうちにスプラティックは他の6人の労働者のはるか背後に置き去りにされていた。彼らは振付師の指導を受けた踊り子の優美さと力強さをもって進んでゆき彼一人が置き去りにされたのだ。また、今が11月で助かったと思う。これを酷暑の4月にするなど考えられなかった。(TLO, p.144)

やがてスプラティックの手は稲の茎や葉で傷だらけになるのだが、彼はそれを恥じる。労働を体験したことのない中産階級の手だからだ。そして痛みを意識的に無視して「自分を変え、そして世界を変えるのだ」と自分に思い聞かせる。(TLO, p.145)

農作業の後の眠り

スプラティックは稲刈りをした日の眠りについても書いている。

あらゆる感覚や意識が完全に無くなるような眠り、骨を砕き、骨が痛むような疲れだ。…ベンガルの田舎の人々があんなに早く床に就くもう一つの理由がわかった。畑で朝の6時から午後の4時まで働いたら、その疲れから口もきけなくなる。10時間の労働の後では人間から魂のない機械に成ってしまうのだ。(TLO, p.146)

脱穀

次の作業は脱穀である。むしろの上に置いた石に刈り取った稲の束を叩き付ける。スプラティックは、ニタイ・ダスや彼のような状況に置かれた人々は、米粒が付いていない茎を衣服に隠し、夜の間に密かに盗んだ、という話を聞いた。その稲の穂に米粒がまだ少しついていることを期待し茎を湯がいたのだ。実際、ニタイは去年、ここでそうしたのだ。(TLO, p.146)

小作人と日雇い労働者として働くカヌーとその食事

カヌーは、仕事があるときにはいつもスプラティックを仕事場に連れていった。小作地と賃労働者として働く二か所の区画だ。後者の区画はレイズとシンハスというマジェリア村の上位カーストに属する二人の大地主の土地で、この土地はマジェリア村のど真ん中にあったのだ。前者の小作労働から賃金として彼が受け取るのは収穫の8分の1であり、大地主のより大きな区画での毎日の労働からは現金を得た。

村のより豊かな中心部分では祭りが行われ、みなが食事にあずかり贈り物が与えられた。この時期は繁忙期で、カヌーのような人々が保証されている90日余りの労働日の一部であり、その間彼らは気が遠くなるような労働にたずさわるのだ。この時期彼らは、一晩水につけておか

れたお米をグリーン・チリや塩で味付けしたものを食べ、畑にでかけ、終わると粒立ちの荒い米とダルが与えられる。それで終わりである。(TLO, p.147)

この時期には毛沢東派の農地改革についての真剣な仲間内の議論や先住民や低カーストの農民との議論はお預けだ。時には疲れ過ぎて眠ることもできない、という。

野生の自然のなかにある村

次に都会育ちのsprattickが、農村の暮らしが野生の自然の一部でもあることに気づかされたある出来事が描かれる。カヌーは家族と一緒に夜小屋のなかで寝るようにと申し出てくれたのだが、sprattickは、外のベランダで寝ることを選んだ。それはベランダの方が広く一人占めできるからであった。しかし、あとでsprattickは、カヌーは外に寝っていると蛇に噛まれると言ったことを知る。蛇という言葉がsprattickには理解できなかったのだ。そしてカヌーは、この辺では夏になると蛇に噛まれる事件がよく起きているというのだ。(TLO, p.147)

シターラの社の背景にあった 1943 年の飢餓

また、sprattickは、この地方の社に伝染病の女神であるシタラ (Shitala) が飾られているのを見て、この地方の宗教や迷信によるものとはか思っていなかった。しかし、サミールの話で、sprattickが幼い頃に大人が話していたカルカッタの町で飢えて死んでいった人々が実はこの地方からの人々であったことを知る。この地方は 1943 年の飢餓によって最も酷い被害にあった所で、ここから何十万人もの人々がカルカッタに向けて逃げ出していたのだ。そして、それがシタラの社があらゆるところにある理由だったことを知る。(TLO, p.147-149) 農民の暮らしの厳しさはsprattickの想像力をはるかに超えていたのだ。

早魃時の小作人や日雇い労働者の立場

次に描かれている出来事は、小作人の無力さをsprattickが思い知らされるエピソードである。

sprattickは、カヌーが小作人として耕す二つの区画を耕して得た米を法律で決まっている量と比較して計算し、カヌーが受け取ったのはその半分であったこと、又、彼らが日雇い労働者として受け取った賃金は本来受け取るべき賃金の3分の1であったことを知る。そしてカヌーは昼の食事の米の量が半分に減らされているのに気づいた。すると労働者の不満の声を聞きつけたマネージャーは、去年の干ばつの被害で厳しいご時世で仕事があり、飯にありつけるだけでも感謝しろ、半分だけでもないよりましじゃないかと言ったのだ。

それを聞いてsprattickはカヌーに、俺がやつと話をつけよう、と言った。するとカヌー

は恐怖で顔を歪め、そんなことをしたら今得ているものも無くなってしまいます。そんな間違いを犯してはいけません。半分だけでもお腹が空っぽよりまし、やつの言っていることは間違っていない。問題を起こすと目をつけられ、二度を仕事がこなくなるのだ、と言った。

スプラティックは、「カヌーの判断は、どんなに惨めなものであろうと僕のよりは鋭いものだった。それに、旦那といわれようと、我々はこの人たちの仲間としてここにいるのであり、色々指図する立場にはないのだ。しかるべき時が訪れたときの我々の究極的な仕事の為以外には」と自分を抑える。(TLO, p.150)

組織されていない小作人の無力な立場を考慮せずマネージャーの不当な扱いに抗議しようとしたスプラティックは自分の判断の思慮の無さを思い知る。ここにはスプラティックの謙虚さも伺われる。

家のなかではビジーがカヌーをののしり、やがてそれはむせび泣きに変わった。察するところ、ビジーは、カヌーが賃労働で得た現金の全てを、これまで高利貸から借りた金の利子の一部の支払いに充てなくてはならなかったのだ。(TLO, p.150)

サンタルの倫理性と警察に守られ闇市に米を売る地主

次の日、スプラティックは彼の稼ぎの 30 ルピーをカヌーに差し出す。カヌーは、そんなことをしてはいけません、と言ったが、彼はその紙幣から目を離せなかった。スプラティックはお世話になっているからと言い、カヌーはその紙幣を手にするが、しっかりと握るのではなく、「何か恥ずかしくて汚いものでも隠しているように握るのだった」。夜になると、また忍び泣く声の中から聞こえた。(TLO, p.150)

ここには、飢えたニタイの妻が物乞いにカヌーの家を訪れながらも恵んでくださいとはいえなかった姿に似たものがある。

深夜、闇市に米を運び出す地主

次に描かれているのは、貧窮しても恵んでもらうことを恥じる品位のあるサンタルとは好対照をなす地主の強欲さである。

深夜、眠れなかったスプラティックは村に近づいてくる車の音に気づき警戒する。警察かも知れないと思ったのだ。しかし、それは警察に護衛された地主レイのトラックであり、暗闇に隠れ、穀物庫に貯蔵した穀物を町に運び、闇市で市場価格よりはるかに高く売ろうとしていたのだ。それは州政府による徴用を逃れる為でもあった。何故、警察が？それは彼らの闇市への売買を、この地域で活動している毛沢東派から守るためである、とサミールは断言する。(TLO, p.153)

農民組織化の困難さ—楽観論から悲観論へ

ムカジーは、次にスプラティック達の農民の組織化の状況について語り始める。

スプラティック達は村についた時から夕方に農民たちを集めて学習会を行ってきた。当初3、4人の参加者しかいなかったが、5か月経って収穫が終わった段階では23人にまで増えた。そうした集会で彼らは、夜中の二時に米袋がこっそりと運びだされたことを話した。

彼らは、少しずつ段階を踏んで話を先へ進めた。「作物は土地の所有者のものだ」を「土地は作物の耕作者のものだ」へと逆転させた。そしてその原理を実践した昨年のナクサルバリの蜂起についても話した。多くの話を費やさなくとも戦闘的な行動へと近づいていることが判った。彼らは、ここに来る前には村人を説得し、行動に立ち上がらせることがどれほど困難なことだろうかと考えていた。しかし、到着して数日後、それは、容易で達成可能なものという楽観主義に転じた。それは農民たちが送っている生活を見たからだ。年のうちの半分の間空腹をかかえて床につき、借金に溺れ、水面に再び顔を出す希望さえ見えず、これから生まれてくる子供たちはその借金の返済に拘束され、血が出なくなるまで吸われ、子供たちは骨と皮でありながら腹だけは膨れ上がり、腕や足が葦のようで、髪の毛は栄養不良で脱色され黄色くなり、彼らの生活は気苦勞で干からびているという生活。彼らの生活はこのようなものであるため、彼らは怒りで煮え立っていると思っていた。だから少し火を掻き立てれば大きく炎上し、吸血鬼たちを巻き込み、燃えつくし、灰にすることができると思ったのだ。

しかし、そのような楽観主義は挫折した。スプラティックが計算に入れていなかったのは何世代にも渡るゆっくりと燃える怒りや貧窮の炎は、その加害者ではなく犠牲者の農民を焼き尽くしてしまったことだ。彼等が燃え立たせようとした火種は燃え尽きて絶望の灰と化していたのだ。彼らは、生きたまますでに死んでいたのだ。彼らには希望も、未来の感覚もなく、ただ現在という病を永遠に若死にするまで生きて行くのみなのである。言い換えれば、灰で火を起こさねばならなかったのだ。(TPO, p.171)

田植えの農作業

やがて田植えの時期が訪れる。彼らが昨年やったのは秋の収穫作業であったが今度は牛と鋤を使って田んぼを耕す労働である。それを体験してみるとその辛さは収穫時の比ではない。灼熱の太陽の日差しの下、硬く乾いた大地に鋤を入れ、牛に引かせ、一直線に耕す作業を貧相な食事にもかかわらず見事にこなすカヌーたちのやせてはいるが強靱な体に驚く。

それぞれ異なる地主の土地で賃労働者として働いている3人は、皆一日の労働の後、池の周りに集まったとき殆ど口もきけない。(TPO, p.195)

生産物の分配をめぐる地主、小作人、日雇い労働者の関係

畑を耕す鋤はカヌーのものであるが、それを引く牛は地主のものである。その為、収穫された米の20%しかカヌーのものにはならない。もし彼が物納小作人であれば、同じ仕事をして40%受け取るのだ。(TPO, p.195) スプラティックはこの論理、つまり、恵まれたものがより多く取り、殆どもたないものがより少なく受け取るという論理が気に入らない。世界はこの法則によって、それによってのみ動いている。スプラティックは土を細かく砕きながら、真夜中に米を密かに持ちだす地主たちや、それを護衛する警察官を叩きのめしている自分を想像した。スプラティックは世界の外に立ち、巨大な棍棒で地球を粉々に打ち砕きたいという衝動にかられるのであった。(TPO, p.196)

ゲリラ活動の準備に入るナクサライト

苗の田んぼへの植え替え作業が終わると彼らは一息ついて、池の端で村の地主や高利貸を襲うゲリラ活動の準備に入る。攻撃対象となる人々のリストがすでに作成されていて、彼らのおおよその行動予定が調べられている。チャンスが訪れたときにそれをタイミングよくものにする備えが必要なのである。一度足を踏み出すと二度目以降はより容易となり、行動に参加する人々も増えて行く。彼らが本気なのを理解してくれるのだ。(TLO, p. 216)

最初のチャンスの到来

ある日、カルカッタから人がやってくる毛沢東派の機関紙が届けられる。それを読み、彼らの運動が西ベンガル、オリッサ、ビハールの三つの州にひろがっていることを知り、勇気づけられる。(TLO, p.240)

そして彼等にもチャンスが訪れる。収穫の最中にディレンがスプラティック達に情報をもたらす。ビプル (Bipul) の兄弟で、小さな土地を所有している為、ビプルより裕福だと思われていたシャンカ・ソレン (Shankar Soren) が、25~30 ビガスの小さな土地の地主のセナパティ・ナビク (Senapati Nayek) に収穫の全てを差し出さねばならなかったと言うのだ。

それはこういうわけだ。1965年に干ばつがあり、1966年にも小さな飢餓があった。その二年間、シャンカの畑から収穫がなかった。そしてシャンカの妻が病気になる、食糧費と治療費の為にセナパティから借金をした。セナパティは、慣例通りシャンカの土地を抵当に入れるよう要求する代わりに、400ルピーを貸し、600ルピー近くを年末までに返済するように要求した。しかし、それは不可能だった。というのは二年続いて収穫がなかったからだ。もしその土地で何かを育て、(普通は自分たちが食べるのであるが) 売ることができたら、借金の幾分かは返せるだろうと考え、さらにお金を借り、彼の土地で育てるために一袋の種を買った。この借金とその利息の返済は、理屈の上では耕作した水田からのお米を充てれば可能なはずだった。し

かしセナパティは単純明快な搾取するのではなくずる賢いやり方をした。彼はシャンカの収穫物を市場価格の半額で買い上げ、その結果、収穫物を全て取り上げ、借金を全額支払ったと思わせた。そしてセネパティは種の利子の支払いと、シャンカの妻が病気をした時の借金の元金と利子の支払いがまだ残っていると云った。

今年シャンカは、元々の借金と新たに種を買った時に借りた金への増大してゆく利子の返済が、彼の収穫量と日雇い労働の賃金では追いつかないことに気づく。つまり、その借金を一生、少しずつ返し続け、ある日、以前より大きな借金が残った形で死を迎えるのだ。借金をゼロにし自由になろうとした挙句である。

これに気づいたときの怒りと不満をシャンカは最も身近な妻にぶつけた。シャンカは、こんなことになったのは妻が病気になり、山のような借金を負わせた性だと責め、毎日殴りつけ、ついに妻はムズリムの居住区にある井戸に身を投げ自殺してしまったのだ。

ベンガルの小説を読む中産階級の人々は、このような話がありふれていることをすでに知っていたので、話自体に何も驚くことはなかった。しかし、ディレンの話はこの後、思いがけぬ方向に展開して行く。

ディレンは、多くの人が周りにいるなかで、シャンカの耳元で、「奴を始末したらどうだ？」と言ったというのだ。シャンカは、あんたは町からやって来て、土地を取り返し、奴隷じゃなくなる方法があると言っている人かい、と聞いたのだ。ディレンは、そうだ、と答え、真剣に計画を立てよう、ともちかけ、シャンカーの同意を得たのだ。(TLO, p.243-245)

この例は、金貸を兼ねた地主が、狡猾非道な方法で農民を一生借金奴隷に追い込み、それに怒った農民が不満を妻にぶつけ妻を自殺にまで追い込む物語である。ナクサライトはそのような農民の怒りや不満を地主への憎しみに向け、武装闘争に立ち上がらせようとする。つまり、地主・金貸しによる理不尽な農民への収奪と抑圧を糧にしているのがナクサライトの運動なのである。

最初のテロ行為

こうして彼らは初めてのテロのターゲットをセナパティに絞りチャンス伺う。そのチャンスは偶然訪れる。近くの村で祭りがありスプラティック達が、祭りの場を利用し他の村の活動家と戦略の議論や情報交換をしていた時、ディレンが玩具の弓矢を買っているセナパティを見つけたのだ。ここでスプラティックの心に疑問が生じる。「思いつきの個人的な行動は危険だし、それに農民たちと一緒にやるべきだ。農民の代理を務める暗殺三人組になってしまっただメなのだ。これは何か、どこかおかしい気がした。だが、ここで何もしないと好機を逃してしまう、という気もしたのだ。日暮近くになりセナパティは酒を飲み始め、やがて日がとっぷりと暮れ落ちたころ帰路についた。マジェリアまで十数キロの真っ暗な夜道である。村の入り口に

差し掛かり、上位カーストの居住区と下層カーストの居住区へと道が分かれる地点で意を決し、スプラティックは金貸しに飛びかかり、口を押え、ディレンとシャンカの二人が手斧で襲い掛かり、殺害したのである。これが「始まりだ」だった。(TLO, p.279-282)

この最初のテロを行うに際し、ムカジーはスプラティックの心に起きた「疑念」を描いている。だがその「疑念」は、彼等の行動が農民を巻き込んだ組織的なものであるかどうか、という点に向けられていて、彼等の行為が、農民を食い物にする貪欲でずる賢い小地主への報復殺人、あるいは復讐的テロでしかないという点には向けられていない。(TLO, p.303)

警察は、殺された男から金を借りていたものには容疑をかけなかった。彼が農民に貸した金の正式な記録が残されていなかったためだ。セネパティの妻は不倫をしていて、相手の男がやったという噂やこの地域の地主のレイとシンハの対立に巻き込まれたのだらうという憶測が飛びかうが、真犯人にはたどり着かず、目に見えぬマントルのように恐怖がこの地域を覆った。(TLO, P.304)

先住民のなかに起きた変化

他方、この最初のテロ事件は、先住民の一部にそれまでにはなかった変化を生じさせる。ディレンが世話になっている家族のなかで、セナパティと同じ目にもう何人が合わせてやろうというものが出てきたというのだ。つまり、この事件は彼等の本気度を示すことになり、先住民のなかに彼等を信頼し、行動を共にしようという者が生まれてきたのである。シャンカは、さらに多くの者に呼びかければもっと集まると言うが、スプラティックは、慎重を期し、当面秘密厳守で行こうと言い、次の行動の計画に取り掛かる。

ジョットダーを中心とする村の人脈

村の人脈はとても複雑だった。ジョットダーは高利貸を兼ね、ジョットダーのイエスマンは質屋、仲買人でもあり、小さな土地も所有していた。だから農民でもあり、不作のときには自分の所で働く労働者を短期間貸し出した。大地主は昔からそうした賃労働者を雇い、農村での人脈関係をより複雑なものにしていた。(TLO, p.305)

ジョットダーはまた別の分野に手を出していた。小売業、セメントやジュート工場の経営、村人の為の雑貨店等である。だが、これはまだ表面に過ぎない。村人はお互いをよく知っていたので、秘密を守るのは至難の業なのだ。だから誰が敵で誰が味方なのか明確な区別をすることは困難であった。そこでスプラティック達は、村で最も憎まれているジョットダーに狙いを定めることにした。(TLO, p.305)

死をも厭わぬ覚悟

その議論のなかでスプラティックは誰も触れなかった点に言及する。敵が銃などの武器をもっていたら、そして誰かが攻撃のなかで死ぬとしたらどうする、と問いかけたのだ。サミールは、もし我々が仕事や金や、権力や影響力が欲しかったら CPI (M) に留まっていればよかった。毛主席とマツムダに従おうと決意したとき殉教者になることは覚悟していたのだ、と言った。

アヌパンは言った。我々が送っているのは生活じゃない。これは一種の死だ。子供たちの世代がもっとましな生活を送れるためなら闘って死ぬ。そして他の農民も賛成した。それは最高の答えであり、それ以上、お互いに話すことは何もなかった。

先住民の心の美しさに打たれるスプラティック

それを聞いてスプラティックの心に浮かぶのはカルカッタに残してきた中産階級の自分の家族との違いだった。サンタルやマハトスの人々の素直さ、まっすぐな性格。我々を彼らの一員として迎えてくれ、少しでも食べ物があればそれを分かちあおうとする態度。彼らは私のものは君のもの、という精神を持っている。私利私欲のない寛大さだ。要するに、言う事と、感じる事が一致しているのだ。自分が持って生まれた心の振じれやひねくれた根性がまっすぐになったような気がしたのだ。確かに、この人たちは口汚いが、それは彼等の心の素朴さと一体なのだ、と思う。(TLO, p.307)

農民大蜂起への道筋と次の攻撃対象

その次に彼等が議論したのは、どうすれば敵に知られずに何百人もの農民を動員できるのか、という問題であった。サミールは、一つ一つのゲリラ攻撃は10~20人の農民を我々の側に引き寄せることができるだろうから、それを何度か続ける必要がある、と言う。

さらに次の攻撃対象についてビプル (Bipul) は最も攻撃しやすいのはバンキムだと言う。バンキムの住居はマジェリアのど真ん中にあり、口にはしなかったが、皆、バンキムを選ぶという必然性を理解していた。

バンキムは、75 ビガス (20 数エイカー) の土地を所有していて、その殆どは貧しい小作人を追い出すことによって得られたものだ。バンキムは、賃貸契約書を偽造したり、彼の犯した犯罪に抗議する農民を警察に逮捕させ酷い罪で告訴させたりしていたのだ。そしてニタイを自殺に追いやった地主もバンキムだった。本当に大きな地主は村には住んでいない。彼らは大きなコンクリート建ての家をジャルグラム等にもっていて、もっと後の段階のターゲットだとされていた。(TLO, pp.307-308)

このような在郷地主がテロのターゲットとなるのだが、ここにナクサライト運動が農村部で

78 (254)

農民蜂起を起こし得たもう一つの根拠がある。すなわち、不正を行う地主と警察との癒着である。だから被害を受けた農民がそれを訴える場が存在しないのである。ナクサライト運動は、機能不全の司法機関の代わりに人々による合意をもとに正義を実行し、新たな秩序の建設を他の農民に呼びかけるのである。

ムカジーは次にテロ攻撃が実際に行われる凄惨な場面を赤裸々に描く。

バンキムの屋敷襲撃

バンキムはレンガとセメントづくりの二階建ての裏庭がある屋敷に住、そこには年老いた母と叔父、妻と三人の10歳以下の子供たちや二人の召使、そして叔父の息子が同居している。

襲撃は朝の二時に決行される。玄関の戸を三人がかりで打ち破り、後の4人はバンキムの逃亡を防ぐために裏のドアで待ち伏せる。中では怯えた叫び声の中に入る前からしている。その声を聴いて、近所の住人が助けに駆けつけて来たらどうしよう、という心配もあったが、もう遅い。一階の部屋にはバンキムの叔父の老人や恐らくは召使だと思われる少年が見つかる。すると二階では女たちとその子供が「助けて、強盗よ！」とベランダで大声を上げ近所に助けを求めている。

スプラティックは老人と少年を台所に閉じ込め、残りの部屋を隈なく探し、二階への階段を駆け上がる。泣き叫んでいる人々は正面の部屋に閉じこもりバリケードを築いていた。バリケードを斧で破壊し部屋に入るが、バンキムはいない。母親から箆笥のカギを取り上げた時、屋敷の外で大騒ぎが起きる。裏庭からである。襲撃に加わった者よりはるかに多い人々が群がり誰かをやっつけているのだ。二階から声をかけるとディレンが奴を捕まえたのだ、という。だったらこの大勢の人々は一体誰なのだ。やがて小さな明かりがつけられ武器を持った14~16人の人々がすでに死体となったバンキムを囲んでいた。バンキムは裏のドアから逃げようとし、待ち構えていた人々に、命乞いをする暇もなく刺殺されたのだ。ディレンによれば、物音を聞きつけて、他の農民も彼等を助けようとしてこん棒、斧、槍等を持って集まってきたのだという。

スプラティックはそれを見て、幼い頃に経験した強烈な喜びに似た感情を経験する。そして世界中に向かって、抑圧者に対して立ち上がるのは人間の自然な姿なのだ、と大声で叫びたかった。

庭には倉庫が二つあり、小さい方にはコメの種が、大きな方には米が貯蔵されていて、その一部は闇市場に売られ、また、農民に貸し付けられ、高い利息で一生縛りつける為に間違いなく使われるのだ。スプラティックは、ディレンやカヌーに言った。「米を全て平等に配ろう！」

家のなかに戻り、妻に金や宝石のありかを聞き、3,000ルピーの金と沢山の宝石がつづらに入っているのを見つける。そして借金の証書、賃貸証書、販売契約等の書類を探させた。それ

はベランダの木の箱のなかにあった。そしてそれを庭で燃やした。その間、農民たちは倉庫の米を袋につめていた。(TLO, pp. 310-311)

このような襲撃の場面を読むと、ナクサライトの活動が夜盗の襲撃と紙一重であることが理解できよう。バンキムは悪党には違いないが、ナクサライトの行動のバンキムに対する倫理的優越性はどこにあるのだろうか、と思わざるを得ない。又、これは法による支配の未成熟な時代、近代国家以前への逆行と言うこともできよう。

マジェリア村から森伝いにベルパリへ逃亡

バンキムを殺し、穀物を農民に分配した後、カヌーはスプラティック達に警察が来るのすぐ逃げるようにと助言する。スプラティック達は、ジャルグラムから警察が来るとき通る道に逆行する形で稲穂のなかを進んだ。空が明らんできたころ、自動車の音が聞こえた気がした。森のより奥深くに進むうちティレンは倒れ込み、寝てしまった。そして彼等も倒れ込み寝てしまう。目が覚めてのどが渴いたが水がない。やがて彼等を頭痛が襲う。脱水症状である。やがて暑くなり、汗が出、虫に噛まれる。

こうしたなかでも彼等は、ベルパハリを拠点にマジェリア村での活動をどう続けて行くのか議論するが、それは無理だという結論に辿りつく。そしてその間、喉の渇きに悩まされ、食糧も無くなる。夜になるのを待って動くことにするのだが、それから8時間は歩かないといけない。こうして朝の2時ごろベルパハリのデブラ同志 (Debdula-da) の家に辿り着き助かる。食物はあまり喉を通らなかったが、水はたらふく飲み、死んだように眠りこむ。翌日の昼頃目を覚ますと昨日の辛さはもう半ば忘れていて、体さえ動けばもう一度同じことをやれと言われても平気だった。(TLO, pp. 333-336)

四人の幹部から全国の情報を聞く

その家には AICCCR の4人の幹部が来ていて、全国的な情勢を知る。去年の8月15日の呼びかけに答え、ビハールでは何百人もの農民が秋の収穫時に何日も警官と地主の手下と闘ったのだ。その結果をもっと詳しく知りたかったが、話はウツタル州での成功の物語と我々の導きとしてのアンドラ州のシュリカラム (Shrikakulam) での先住民と一体になった闘いへと移っていった。そこでは、大衆が立ち上がり、拠点が形成され、地主が十人以上殺され、農民が土地を自分のものにし、作物も押収されたのだ。それは散発的なゲリラ攻撃から始まり、本格的な農民蜂起へと発展したのだ。(TLO, p.336)

そして AICCCR の内部で路線論争と新党結成の話が巻き起こっていた。封建体制打倒を中心的課題とするチャル・マツムダの路線とナギ・レディ (Nagi Reddy) のアメリカ帝国主義とソビエト社会帝国主義との闘いの路線である。マツムダは地下活動を主張したが、労働組合

の指導者のパリマル・ダスクプタは、それは一種のチェ・ゲバラ主義であるとし、大衆運動、農民だけでなく労働者も巻き込んだものにすべきだとしていた。

その中で、突然、1人の男が、どうしてわざわざこんな遠いところまできたのだ、途中で幾つも仲間のいる村があるのに、と言って我々を驚かせた。村と村を繋ぐ連絡係が必要であった。ディレンが連絡係りに名乗り出た。スプラティックは三人が一緒の方を望んだが、非革命的なブチ・ブルといわれたくないために黙って受け入れた。

その後のマジェリア村

それから数日は路線論争に費やされたのだが、スプラティックはマジェリア村のことが気にかかってしかたがなかった。警察の手入れに備え村の体制を整える間もなく逃げ出し、ここに来たからだ。スプラティックは、サミールと共にマジェリア村の様子を見るためにこっそりカヌーの家に行く。ビジリによれば、村は大変なことになっていた。警察の襲撃があり、この村や隣村の住民を殆ど留置所へ連れて行ってしまったのだ。ビジリは僕を責めた。そしてやつらは外部の扇動者として俺たちを追っていると教えてくれた。そして、逃げろ、と言った。

彼等の元々の計画では、殺害したジョットダーの土地を押さえ、次の収穫期まで持ちこたえることになっていたのだが、仲間が全員留置所に拘束された中で、二人は途方に暮れる。やがてサミールは、ベルパハリで与えられた指示に従ってギディガティの組織に合流すべきだと提案する。スプラティックは、後に残す村の人々の運命に後ろ髪を引かれ、かつ彼等がここで引き下がることによってマジェリア村を永遠に失ってしまうこと、つまり毛主席がいう「鎧の隙間」となってしまうと言うが、サミールは、それしか前に進む道がない、と言う。スプラティックが、彼等の戦略の弱点に気づき始めたのはこの時点においてであった。すなわち、人手の不足、最悪のシナリオに備えた計画性の無さ、連絡組織の必要等、一連の彼等の弱点について考える最初の切っ掛けとなったのだ。(TLO, pp. 338-339)

森のもつ魅力に気づくスプラティック

ギディガティに到着したスプラティックは、ゲリラ活動にとっての森の有利さに魅了される。マジェリア村では回りの森に入るためには1, 2マイル歩かねばならなかったが、ここでは先住民の村はほとんど森のなかにあると言っても過言ではなかったからだ。ここなら、ベルパハリまで森から出ることなく身を隠したままで移動できたのだ。(TLO, p.340)

新たな同志との合流とサンタル達の提案

スプラティックはそこで新たに三人の同志と行動を共にすることになる。アシュ、ディパンカー、ディバシシの三人であり、彼等はすでに二度のゲリラ行動を行っていた。一度は我々と

同じような暗闇での襲撃と殺害であり、二度目は地主の傲慢な息子の白昼の殺害であった。(TLO, p.341-343)

再びマジェリアで経験した農作業を繰り返した後に、この村のサンタルの男たちはある計画を彼等に提案する。それは村人たちが彼等を守るために彼ら自身の、あるいは別の村の友人の家に匿い、場合によってはジャングルのなかに隠したりする、というのである。色々な議論の結果、貧しい、土地の無いギディガティの農民たちは、我々の戦略を受け入れる決意をし、その為に我々を守るというのだ。(TLO, p.343)

ディレンとの再会と毛沢東派の結成

今や伝令となったディレンがやってきて、1969年5月1日、カルカッタのマイダンで開かれたメーデー集会で、CPI (M-L) (毛沢東派) がチャル・マツムダとカヌー・サンヤル (Kanu Sanyal) によって正式に設立されたという知らせを伝える。3か月前のことだ。ディレンがやってきたのは別の任務もあった。彼らを匿ってくれる村人の名前と武器を持ってきたのだ。会議の後、かつてのマジェリアの三人組が久しぶりに旧交を温め、ディレンの伝令としての仕事の困難さと革命にとっての重要性を知る。(TLO, p.344)

ジディガティの農民が土地を騙し取られる物語

スプラティック達はギディガティの村の外れで、森と殆ど接するばかりの位置にある最も貧しい農民ビール (Bir) が住む小屋に匿ってもらうことになる。これがビールの物語だ。

ビールとその家族は昔から貧しかったわけではない。かつては小さな土地を持っていたのだが、それを村の役人の勧めで人に貸すことになった。字が読めないビールは契約書に親指をハンコ代わりに押したのだが、賃貸料が滞ってきたので集金に行くと、実はその契約書は売買契約書であったことを知る。彼は市場価値の40分の1で自分の土地の半分をナビン・サルカ (Nabin Sarkar) に騙し取られ、村の役人は買収され詐欺に手を貸していたのだ。訴えても無駄だった。訴えはその村の役人が受け付けていたのだ。そして抗議するとビールは、お前の妻の名誉と命が欲しければやめろ、と言われたのだ。ビールは、ジャルグラムの警察に訴えた。しかし警察は、ビールが契約書にサインしてしまっているのも何もできないと言った。サルカには、警察を買収する金があったがビールには無かったので警察は指一本動かそうとはしなかったのだ。二か月後、彼の小屋は一団の男達に家探しされ、破壊された。彼は、人手に渡ってしまったかつての自分の土地の端に住んでいたのだが、今や、不法にそこに住んでいると警察は言うのだ。そして、もし、そこに新たに家を建てると刑務所送りだ、そして、残された家族に何が起きるか、誰にもわからないぞ、と脅かされたのだ。彼が森の端の今の家に住むことになったのはそういう事情だったのだ。(TLO, pp. 345-346)

ビールは、字の読めない先住民の弱みにつけこんだヒンズー教の農民、警察、行政による土地の窃盗の犠牲者だったのだ。

三度目の襲撃

その話を聞いたスプラティックは、ビールの耳元で、その役人とナビン・サルカ殺害をもちかけ、30名の仲間を組織しサルカの屋敷を襲う。相手も彼らの攻撃を察知し反撃したため闘いは激しく凄惨なものとなる。役人はその場において殺害できたが、肝心のサルカは事前に攻撃を察知し逃亡していた。騒ぎが収まった後、スプラティックはサミールがいないことに気づき探すと屋上で凄惨な姿で死んでいたのだった。こうして彼等は村には住めなくなり、近くの森のなかに身を隠すことになる。(TLO, pp.347-348)

森に身を隠す

森に隠れた最初の日の午後、ほら貝がけたたましく鳴った。警察がギディガティにやって来たことを村人が彼等に知らせる合図であった。

警察との戦闘に備え、彼等は森のなかで布陣を整えるが数時間経っても警察はやってこない。その間、スプラティックはディパンカーにマジェリア村へ行く道を教えてもらう。村に残してきたカヌーやビジューのことが気になるのだ。また、シャンカの屋敷を襲撃した折のことを話題にするが、話がサミールの死骸を屋上で発見するところに来ると、スプラティックは、思わず人目も構わず泣き崩れてしまう。ディパンカーはスプラティックの気持ちを察し、「強くなるのだ」と言い残し一人にしておいてくれる。

ビールが夜に食事と水、情報を持って戻ってきた。警察が彼らの住んでいる所に来て、20人ばかりジャルグラムに連れていった、という。

アシュは、連れて行かれた連中はどうなるだろうか、と聞く。ビールは、警察は誰がこの殺人事件の背後にいるのか聞き出そうとするだろう。あの連中は殺された連中に金を貰っていたから死んでしまったら困るのだ。もし彼等が喋ってしまったら、と言うと、ビールは笑いながら誰も喋らないよ。警察もついでに始末したいと思っているのだから、という。それにやって来た警官の数も以前ほどではない、という。それを聞いてスプラティックは、奴らはあちこちで攻撃が起きているので手薄になっているのだ、今がチャンスだ、と突然閃いて言った。(TLO, pp.355-359)

森のなかでの警官との戦闘と警官の殺害

次の日、またほら貝がけたたましく鳴り響き、警察がやってくる。彼等は森のなかで広く弧を描く体制をとり待ち構える。するとカサカサと人が近づいてくる足音がし、銃声がし、やが

でもう一発。ディパンカーの銃だった。そして3人のサンタルたちは森のなかを逃げる3人の警官の後を追い殺害するが、残りの一人は森の奥に逃げこむ。彼等は警官のライフル5丁と制服を奪う。

三人のサンタル達は森に隠れている彼等に水と食料を供給し続けた。スプラティック達は警官殺しの不可避的な結果を待ち受けていた。もはや後戻りはできないのだ。だが警察はやってこなかった。それを巡って彼等は際限のない議論を繰り返す。そのうち三人のサンタルたちが半ば推測の域を超えないニュースをもたらした。彼等の村に警官はやってこなかったというのだ。武装警官でさえ警官殺しの犯人を追い出すために森の中に入ることを拒否しているという。それを巡ってまた果てしない議論が繰り返されるが、その間、サンタルの友人たちは彼等を森のなかに匿ってくれたのだ。(TLO, pp.359-360)

こうしてスプラティックたちの闘いは新たな段階に入る。警官殺しの罪を犯し、森を拠点にした警察とのゲリラ戦の段階である。

森で生きる術を習う

森に逃げ込んだスプラティックたちは、そこで生き延びる術をサンタルたちから教えてもらう。

サンタルの同志たちは森に我々を隠し、食物と水を与え、そして森で生き延びる術を教えてくれた。風向きの読み方、森のなかの道を知る術、どの木の下で寝てはいけないか、どの虫が毒を持っているか、ネズミや蛇が住んでいる穴の見分け方、どの乾いた葉っぱを利用し、夜に寝床替わりに使い、地面の冷たさや湿気から身を守ることができるのか、小さな茂みのなかのどの葉っぱをすり潰し、傷や虫に噛まれたあとに塗ればいいのか、赤い土が茶色い色に変化するのは何を意味するのか？どの木が燃やしたときに煙をださないのか？木の並びからどのように森のなかで方向を見定めるのか？道を見失った仲間にもどのようにして我々が通った道の印を残すのか、弓矢を持ったものに森のなかを追いかけられたとき、どのようにして逃げるのがよいのか、等々。僕は必死になって教えられることを頭にいれようとした。お蔭で、他のことを考えなくてすんだのだ。(TLO, p.360)

解放区としての森

スプラティックは、森を単に彼等の隠れ場にするだけでなく、森の周りの住民との連携のもとに国家やその武装部隊が近づけない地域、解放区にしてしまう可能性についても考え始める。ここに現代のインド中央部の森林地帯を拠点とするナクサライト運動の原点を見ることができよう。現代の闘いと類似性を思わせるのは軍隊が派遣されるという展開である。

軍警察がマジェリア村に駐屯

次の日、ディパンカーとスプラティックは、森伝いに再びマジェリアに向かった。カヌーやビジーのことが気になったからだ。だが彼等がそこに見たのは村の学校に駐屯している軍警察であった。兵隊の話声からビハールから派遣された部隊だと推測された。彼らを敵に回すことなど問題外であったので、彼等はマジェリアを去らねばならなかった。

彼等が村に戻り、申し合わせてあったように革命歌を唄い味方の接近を知らせるとアシュとデバシシュがジャングルのなかから現れたのだが、その姿は慢性的な飢餓状態にある乞食のような有様であった。だが彼等とて我々の姿を見て同じように思ったに違いない。

そして驚いたことには、ディレンもそこに匿われていたのだ。(TLO, pp.364-365)

ギディガティには東部戦線ライフル部隊

嬉しい驚きの後には厳しいショックが待ち受けていた。ディレンの情報によると、「東部戦線ライフル部隊」(EFR) がギディガティに野営地を設けたという。CPI (M) の内務大臣のジョティ・バスのこの地区の警察署長の要請を受け、テロに襲われた地域に軍警察と EFR を配置せよという命令を出していたのだ。警察を手中に収めている地主と殆どの政治家は公私ともども結託し、州権力のトップを動かしたのだ。(TLO, p.366)

サンタルのバプーとビールはどうしたのかとスプラティックが聞くと、家族のことが心配になり村に戻ったまま帰ってこないという。つまり彼等は食物の供給源を絶たれていたのだ。アッシュは、ベルパハリに退却し、作戦を立て直す必要があるという。ディレンは、彼らの作戦行動があった地域には軍が配置されたか、そのうち配置されるだろうという。彼等の心は怒りと絶望に揺れた。

スプラティックは、もし軍に一定の打撃を与えることができれば、彼等が本気であることを示すことができるだろう、言ったが、皆顔を背け自分の心にこもってしまった。(TLO, p.366)

軍隊への攻撃と敗走

彼らは結局、ベルパハティに一度退却し、5人で再びギディガティに舞い戻り、手製の手りゅう弾で軍に攻撃をかけようとする。ギディガティを選んだのは森に近く敵の攻撃に直接晒される可能性が低いからであった。だが、軍を襲うという計画はひどい間違いだったことを知る。

彼等は学校の正面と背後の二手に分かれ攻撃をかける計画であったが、これまでの攻撃の場合とは違い、今回は気分が重かった。

警護の警官がイスで居眠りをしていたが、彼等との間にはかなりの空間があり、身を隠すことなどできなかった。そして学校では犬が何かのにおいをかぎつけ吠え始めた。鳴き声でハッと目を覚ました護衛の警官に我々は一斉に飛びかかった。

アッシュは手斧で兵士を倒し、スプラティックは犬を撃った。爆発音が聞こえた。ディレンかディバシシが背後から建物のなかに手りゅう弾を放り込んだのだ。さらにもう一発。そして銃声と人が叫ぶ声がした。彼等は地面に伏せ、誰か学校から飛び出してくるのを待った。学校の裏側での騒ぎが今や頂点に達した。だが爆発音はもう聞こえなかった。ディレンとディバシシは捕らえられたのであろう。アッシュが死んだ護衛から銃剣を引き抜こうとしているところに二人の兵隊が飛び出してきた、一人がアッシュの腹を銃剣で刺した。スプラティックとディパンカは手りゅう弾を4発教室に投げ込み、兵隊の一人の太ももに斧で打撃を与えた。もう一人は人を呼びに戻った。その間、二人は森のなかに逃げ込んだ。爆発音が二度した。ディレンとディバシシのうち一人は生きているのだ。追っ手はこなかった。ということは残された二人の命が我々の命と引き換えになるということを意味した。

ディパンカは息も絶え絶えながら「ビハールへ、ビハールへ」、と言った。その日は軍にも森を搜索するほどの十分な人手がなかった。だから我々は警官に森を取り囲まれる前にここから出ないといけなかったのだ。(TLO, p.368)

こうしてナクサライトによる攻撃が行われた村々に軍隊が派遣されるに至り、スプラティックは森を離れ、カルカッタに戻ることになる。

スリカラム (Srikakulam) の闘い

ムカジーが描いたスプラティック達の農村地域での闘争は、この当時各地で頻発したナクサライトの農村での運動と比較してどのような規模のものであったのだろうか？それを知る上で、ナクサライト運動の理論的指導者であったマツムダが、かつてナポレオンがプロイセン軍を打ち破ったイエナの戦いになぞらえ「インドのイエナ」とさえ名付け、「他のナクサライトの道を照らす明かり」と言われるようになったスリカラムでの武装闘争を毛沢東派の立場から記述したのを見てみよう⁷⁾。

アンドラ州の北東に位置するスリカラムはギリジャンと呼ばれる先住民の住む地域である。この地域においてはCPI (M) の二人の若い教師が1950年代末からギリジャンの中に幅広い拠点を築き上げていて、「収穫物の収奪、土地の占拠、地主との衝突が激化し警察との武装闘争へと展開していた」のであるが、州のCPI (M) 指導部と対立するようになった。そして警察による鎮圧が激しくなり、州指導部が彼等を支援しなかったため彼等は武装解除され恐慌に陥った。

そうしたとき、ナクサルバリのニュースが届く。スリカラムの指導者たちはそこに彼等が探し求め、CPI (M) 指導部が提供しなかった方向性を見出し、今や先住民たちは強力な部隊に再編された。

1967年11月、二人の同志が地主によって撃ち殺された事件が引き金となり、ギリジャンた

ちは地主に対し反乱を起こす。地主の土地、財産、穀物の収奪が村から村へと広がり、ギリジャンたちは伝統的な武器で武装し、グループに分かれ行動した。これが6か月に渡り継続し、地元の警察の動きを麻痺させた。しかし、1968年3月インド中央政府が大量の警官を投入。ギリジャンたちは反撃したが、ゲリラ戦の訓練を十分受けていなかったため敗北に直面した。

だがAICCCRと連絡を取ることができて以降、戦闘部隊への編制やより体系的な抵抗を行うという決定がなされた。戦闘部隊が地主の財産の収奪や階級敵の殺害を助けた。1968年11月、250人の先住民が地主の屋敷を襲い、蓄蔵された穀物や2万ルピーの価値のある財産を運び出し、何百もの書類を焼却したとき、武装闘争が彼等の明確な課題となったのだ。1968年の12月にはある村で500人の村人が石や弓矢、そして一丁の手製の銃で武装し、200人の警官を襲い、驚かせた。警官は逃走し、村人が後を追ひ、二名の警官と一人の巡回監視官を殺害した。

1969年には戦闘部隊の数はさらに増え、攻撃数も増加した。しかし1969年の11月にはINC中央政府は12,000人のCRPF(中央武装警察隊)を送りこみ、戦闘は6か月近く続いた。いくつかの大きな闘いがあり、1970年の1月までには120人の警官が殺された。しかし、指導者が次から次へと殉死し、地元の民間伝承の英雄となったのだ。

このようにして、スリカラムの武装闘争は、一面では、現代のナクサライトからは、1960年代の運動の最も成功した事例の一つとして称えられているのであるが、他面では、その成功は地方警察を圧倒するという限定的な成果にとどまり、結局、INC中央政府の強力な軍を打ち破ることはできなかった。その意味では、武装闘争による革命の道を選択せず、都市を基盤として一定の民主主義的諸制度を発達させているという側面に目を向け、選挙による多数派の獲得による政権の獲得を目指したCPI(M)が正しかったとも言えるのである。

そして、1970年代初期の段階に至るとナクサライトの活動はカルカッタでのテロ活動に移行する。しかし現実にはナクサライトはCPI(M)やINCの活動家による攻撃の標的となり、三つ巴の闘いという様相を呈する。他方、ナクサライトは州警察による逮捕と拷問による他の活動家の情報割り出しと逮捕により、その活動は鎮圧される。

この時期のナクサライトの運動を支えていた精神について、アマタブ・ゴーシュはアビンドラ・レイを引用しつつ、「ユートピア主義というより虚無主義」であった、と指摘している⁸⁾。筆者は、それは正しいと思う。何故なら、この時期のナクサライトの運動は都会における無差別の爆弾テロや、対立する党派との「生き残るための闘い」という様相を呈し、農村での闘いにはあった、貧しく無権利な農民と一体化し、彼等の立場に立って地主・金貸しからの理不尽な抑圧と闘うという大義はもはや失われていたからである。『他者』の中でそれが如実に表れているのが、爆弾テロのための資金集めのために、スプラティックが叔母の宝石を奪い、召使のマダンに罪を着せるという行為であった。皮肉にも、それが暴かれるのは警察によるスプラティックの逮捕と尋問の過程だったことである。

警察は尋問の過程で上流中産階級の恵まれた境遇に育ち高等教育を受けた都市のインテリゲンチャーが何故、田舎の農民の暮らしに飛び込んだのか、と質問し、「スプラティックが貧しく虐げられた農民の為に他に誰が闘うのか？」と切り返すと「貧しく困っている人々にそんなに肩入れしている君はどうして料理人のマダンに叔母さんの宝石を盗んだ罪を被せたのだ？」と突然、それまでのお道化た調子から一変し、冷たい鋼のような鋭い口調で詰問する。「君はテロ活動の資金のために叔母さんの宝石を盗んだのだ。・・・」警察にそこまで知られていたことにショックを受けスプラティックの顔には汗がにじみ出る。「だからマダンのためには闘わないということだな。やつの命はお前のような中産階級の青年たちが危ない火遊びの道具じゃないぞ」。それを聞いてスプラティックは恥辱感に身が焼かれる思いをする。」そしてマダンに罪を着せようという発想が心に浮かんだ瞬間を思い出そうとすることができない。

プリモナの宝石を盗んだ犯人を、プリモナとの間に数十年の軋轢があったチャヤにしたてる道を選ばず、何故マダンを罪びとにしたあげたのか？スプラティックの心に浮かんだのは、もし50人の持たざるものの為に一人の持たざる者を犠牲にする必要があるのなら、感情のようなつまらぬものに惑わされてはならない、という算術的な計算であった。そういう考えで行動したのであるが、今やその計算は彼に何の慰めも与えてくれなかった。自分は階級的な観点からそうしたのか？つまり身内が盗むというより召使が盗むとした方が信ぴょう性があり自然だったからか？マダンに濡れ衣を着せる方が警察を欺きやすいからか？それとも召使を裏切ることの方が身内を裏切るより犠牲が少ないからか？そのような間にスプラティックは耐えられなくなり、やがて彼が4歳のとき、怪我をした自分にマダンが駆けつけマークロキュロムを塗って慰めてくれたことを思い出したのである。彼は誰かが、壊れやすい陶磁器が並んだ棚を手で無造作に薙ぎ払ったような気がした。(TLO, pp.473-478)

ナクサライト運動の意味

ではナクサライトの運動は無意味だったのか。そうではないことを一番理解していたのはナクサライトと対立していた西ベンガルのCPI (M) 自身だったのかも知れない。何故なら、インドラ・ガンジーによる「非常事態宣言」による政治の混乱が終焉を迎えた1977年、西ベンガルでは、CPI (M) 主導の「左翼戦線政府」が樹立され、毛沢東派が武力で実現しようとした農地改革に合法的方法で取り組み始めたのだ。

CPI (M) は「バーガー作戦」(Operation Barga) と呼ばれる小作人の大きな運動を1978年からスタートさせ、小作人たちが耕作してきた土地を登記所に正式に登録させることにより土地への永代的借地権を保障し、かつ収穫のうち彼らの取り分を(収入)を増やした。1978年まで240万人の小作人のうち登記されていた小作人は40万人に過ぎなかったが、この作戦の開始以後、1979年の70万人から1990年の140万人に増えたのだ。

他方、中間搾取を行うジョットダーを完全に抹殺することもなかった。ジョットダー自身が中間的な規模の農民でもあり、農村部で小売店を営業し、町では教師、事務員、等として働いていたのである。こうした農村における下層中産階級を完全に敵に回すことは政治的にまずいので、彼らの農産物への一定の権利は認めることにしたのである。これは連合政権という形式をとる場合、不可欠な政治的配慮であった。

このような改革は、関係者全てに生産を拡大しようという刺激を与え、「緑の革命」(種子の改善、肥料の大量投与、農薬の使用、灌漑等によるコメの多産化計画)や多毛作の導入への要因となり彼らの収入を増やしたのである。

また CPI (M) は、大地主が自分の土地でありながら他人名義で制限面積を超えて所有している土地を洗い出し、土地を持たない農民に配分するという課題に取り組み、大地主を敵にまわさないよう年月をかけて慎重に行ったのだ。そして左翼戦線政府は、そうした改革を補完すべく小作人や小農民に低利子の融資を行い高利貸しから彼らを守った。こうして土地を持たなかった農民たちが「緑の革命」に投資するのを助けたのである。西ベンガルの共産党主導の「左翼戦線」政府は、こうしたことをうまく成し遂げた数少ない政府の一つだった。

また ICP (M) は、1960 年代には失敗に終わった、村落統治機構としてのパンチャヴァティ・ラジ (Panchayati Raj) の改革を成功させた。これは所謂村の長老会議的な伝統的統治機構であるが、左翼戦線政府はそこから大地主階級や他の支配的な集団を追い出し、下層、下層中産階級、教師、活動家等を運動に巻き込み、州の官僚機構を彼らの統制のもとに置いたのである。

また左翼戦線政府による反貧困・雇用創出計画は他の州より良い効果を上げた。また、道路建設、土地の排水、灌漑水路の整備や村の貯水タンクの清掃等が行われ、しかもそれが民主化された長老会議を通じて実施され、村の下層階級の状況が改善されるとともに腐敗も抜本的に解消された。(Chandra 2011, Chapter 23, *Politics in the States*, pp.7311-7394)

このように、CPI (M) が「左翼戦線政府」のもとで西ベンガルの農村部で行った諸改革は、ナクサライトの闘いによって浮き彫りにされた小作人や土地を持たない農民を苦しめていた深刻な諸問題を解決しようとするものであった。CPI (M) は、そうした問題を州政権の課題とし、合法的な方法で、かつ、農民の大衆運動を組織する形でその解決に取り組んだのだ。以前ならば農地改革に断固として反対した地主たちも、ナクサライト運動を経験し、妥協の必要を感じたのであろう。その意味でナクサライトの運動は、客観的には ICP (M) による合法的改革を助けたのであろう。又、ICP (M) は地主勢力を敵にまわす態度はとらず粘り強く説得に努めたのである。

ではインド全体ではどうであったのか？ナクサライトによる地主の土地の収奪が限られた成果しか上げられなかったことや、運動そのものが迅速に鎮圧されたにもかかわらず、全体とし

て見れば、ナクサライトの運動はシンボリックな意味で大きなインパクトを与えた。インド中の関心が農業問題に劇的に注がれたのである。1960年代と1970年代に、二度目の農地改革の機運が生まれたのは、そのような社会文脈のもとであった。1964年には「農地改革促進全国委員会」が、農地制限法の抜け穴をふさぐ作業を始め、ついで政権を取ったインドラ・ガンジーは、1970年9月に各州の第一首相を集めた農地改革をテーマとした会議で、「実施された農地改革法は、独立運動の時代に培われた何百万人もの耕作者の期待にそうものではなかった」と断言し、「要するに、小さな農民や小作人、土地を持たない農村労働者が農業問題におけるニューデールの利益を共有できるような制度的条件を創り出すことが必要なのである」と述べたのだ。この会議で議論された最大の問題は、地主が所有できる土地の上限を削減するか否かの問題である。殆どの州の第一首相はそのような提案に大反対であったが、それ以後、この問題は「中央土地改革委員会」に委託され、1971年に委員会は、上限のかなりの削減、所有を家族単位に限定すること、削減された土地の土地を持たない農民への市場価格以下での払い下げ等を含む一連の提言を行った。そして基本的にその趣旨が1972年の第一首相会議で、激しい反対の果てに、最後には承認されたガイドラインに生かされたのである。そして、その後起きたガイドラインに反対する無数の訴訟を見据え、それを将来にわたって防ぐために、政府は1974年に憲法修正34条を議会で通し、憲法を根拠にそのような訴訟を起こすことを無効としたのである。そして上限を超える土地の払い下げは1980年代に入っても継続され、1985年には7百20万エーカーの土地が上限を超えていると宣言され、そこから4百30万エーカーの土地が3百30万人の土地を持たない農民のものとなったのである。さらにその半分以上がダリットと先住民であった。この動きは1990年代に入っても続き、土地を持つことのできるようになった農民の数は増大したのであるが、インドの農業における不平等は大きな規模で続いたのである。

しかし長期的に見ると、土地の上限法は、農民の土地からの追い出しによる土地の集中を防ぐことになった。確かに、上限を超過した土地を農民に分配するという当初めざされた目標は十分には実現できなかったのだが、長い目で見ると、高い人口増大率と何世代かの間における土地の細分化の結果、上限を超えた土地が殆ど残っていないという結果となり、半封建的な時代の大地所有は過去のものとなってしまったのだ。(Chandra 2011 : Chapter 29, Land Reforms (III) : No 9667-9722)

1970年代中盤以降のナクサライトの運動は、都市において沈静化した後も軍隊の手の届かない森林を基盤に継続され、インド中央政府主導の新自由主義的鉱物資源開発が大きな問題になるにつれ先住民や下層カーストの人々の土地を守る闘いに合流し、1960年代末のナクサライト運動においてすでに萌芽的に見られたジャングルの利点を生かしたゲリラ活動として展開され、ロイによれば、支配地域において一定の行政機構さえ整備しつつあるという。

これまで見てきたように、かつてのナクサライト運動が批判すべき点を持ちつつも、その運動が目指す大義の故に、インドの中央、州政府に改革を迫ったように、現在の運動がインド社会全体の進歩につながることを祈りたい。

注

- 1) "Maoist Rebels Widen Deadly Reach Across India" by JIM YARDLEYOCT. NY Times, 31, 2009
http://www.nytimes.com/2009/11/01/world/asia/01maoist.html?_r=0
- 2) 筆者は、2016年7月16日、法政大学で行われた「アジア・アフリカ研究会」の年次総会の際に行われた「ベーシック・インカム」運動の提唱者でインド女性自営労働者組合 (SEWA) のサラット・ダバラ (Sarath Davala) 氏を招いての講演会に参加した際、「オペレーション・グリーン・ハント」についての氏の意見を聞いた。氏は、ナクサライトの運動の大義には賛成だとしつつも、武装闘争は解決にはならない。政府はナクサライトの暴力を理由に自己の立場を合理化している。インドにはガンディー以来の平和主義と対話による解決の方向がある。政府との対話による解決を目指すべきであると言う趣旨の発言をされた。
- 3) Cross Current, Learn About Japan, 7. Land Reform in Post-War Japan, <http://www.crosscurrents.hawaii.edu/content.aspx?lang=eng&site=japan&theme=food&subtheme=AGINDSTRY&unit=JFOOD007>
- 4) Amitav Ghosh, Neel Mukherjee's *The Lives of Others: A Book Review*, Chrestomather, May 3, 2014 in uncategorized. <http://amitavghosh.com/blog/?p=6400>
- 5) United Front (1967), Wikipedia, [https://en.wikipedia.org/wiki/United_Front_\(1967\)](https://en.wikipedia.org/wiki/United_Front_(1967)).
- 6) スプラティックは、幼い頃彼の心に深い印象を残したブッダにまつわる物語を思い出す。それは幾年にもわたり弟子として認められたいとブッダの後についてきた男がある日、挫折し、ブッダの足元に身を投げ出し、「私は無しか所有していません」(何ももっていません)と言う。それに対し、ブッダは「その無も放棄なさい」と言ったのだ。(TLO, p.419)
- 7) (Naxal Resistance, <https://naxalresistance.wordpress.com/2007/09/17/30-years-of-naxalbari/>)
- 8) Amitav Ghosh, Neel Mukherjee's *The Lives of Others: A Book Review*, Chrestomather, May 3, 2014 (Ibid.).

参考・引用文献

- Chandra, Bipan. Mukherjee, Mridula. Mukherjee, Aditya. *India Since Independence*, (New Delhi), the Penguin Group, 1999. 2008年には改訂版がでている。本書には改訂版の DK Digital Media, India 電子版 (2011年) を参照した。
- Guha, Ramachandra. *India after Gandhi: the History of the World's Largest Democracy*. (London), Macmillan, 2007. 本書には Pan Books の電子版 (2010年) を参照した。
(『インド現代史 (上・下)』ラマチャンドラ・グハ著 佐藤宏訳 明石書店 2012年)
- Mallick, Ross. *Indian Communism: Opposition, Collaboration and Institutionalization*. (Delhi), Oxford University Press, 1996.
- Mukherjee, Neel, *A Life Apart*, (London), Constable & Robinson LTD, 2008. *The Lives of Others*,

立命館国際研究 29-2, October 2016

(London), Chatto & Windus, 2014. 本書には Vintage 電子版 (2015 年) を参照した。

Ray, Rabindra, *The Naxalites and their Ideology*, (New Delhi) Oxford University Press, 1988.

Roy, Arundhati, "Mr. Chidambaram's War," *Walking with the Comrades*. Hamish Hamilton, a member of Penguin Books India 2011.

(加藤 恒彦, 立命館大学国際関係学部教授)

A Study of Neel Mukherjee's *The Lives of Others* with Special Reference to the Frustrated Land Reforms after the Independence of India and the Naxalite Movement

This paper is a study of Neel Mukherjee's recent novel, *The Lives of Others*, one of the finalists of the 2014 Man Booker Prize, mainly focusing upon the part of the novel which depicts the Naxalite or Maoist armed insurgencies in the West Bengal villages from the late 1960s to the early 1970s.

It is the author's assertion that this book is Mukherjee's literary response to the ongoing "Operation Green Hunt," the Indian government's military operations in the central mountain area of India against Naxalite guerrillas and the indigenous and low-caste farmers, who stood up in arms to defend their land from the multi-national mining companies looking for profitable mineral resources buried deep under it. This is an important act of resistance against the worst case of Neo-liberal economic policies pursued, in violation of human rights, by Indian governments since 1991.

The purpose of this paper is to rethink the historical origin of the Maoist movement in the light of the frustrated land reforms after Independence in India, which left many tenant and landless farmers at the mercy of greedy new land owners-cum-money-lenders, a situation that was the main cause for the farmer's armed uprisings for land ownership, secured tenancy and more equal distribution of wealth.

To validate these assertions this paper analyses how Mukherjee describes many cases of land-owners and money-lenders exploiting and depriving illiterate indigenous and low caste farmers of their land, livelihood and hope to live, and how they decided to join the Maoist rebellion.'

Although Indian central and state governments were strong enough to soon subdue those armed uprisings, the author also contends that their sacrifices were not without social results. CPI(M) in West Bengal as well as the INC central government took those uprisings seriously and regarded them as a chance to introduce more effective land reforms. As a result, the semi-feudal land ownership as it had existed until the 1970s was considerably reformed.

(KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

